

令和7年度入学 看護学部 一般選抜・後期 試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	—	平田 オリザ	わかりあえないことから— コミュニケーション能力と は何か	2012年 pp.178-191より 一部改変	講談社

令和7年度 一般選抜・後期

## 看護学部

### 小論文 (90分)

#### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、4ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(150点)

ホスピスに末期癌<sup>がん</sup>の患者さんが入院してきた。50代の働き盛りの男性で余命半年と宣告を受けている。奥さんが24時間、つきっきりで看護をしている。

さて、この患者さんに、ある解熱剤を投与するのだけれど、これがなかなか効かない。奥さんが看護師さんに、「この薬、効かないようですが?」と質問をする。ホスピスに集められるような優秀な看護師さんだから、患者さんからの問いかけには懇切丁寧に説明をする。

「これは、これこれこういう薬なのだけれど、こちらの他の薬の副作用で、まだ効果が上がりません。もう少し頑張りましょう」

奥さんはその場では納得するのだが、翌日も、また同じ質問をする。看護師さんは、また親切に答える。それが毎日、一週間近く繰り返されたようだ。やがて、いくら優秀な看護師さんでも嫌気がさしてくる。ナースステーションでも、「あの人はクレーマーなんじゃないか」と問題になってくる。

そんなある日、ベテランの医師が回診に訪れたとき、やはりその奥さんが、「どうして、この薬を使わなきゃならないんですか?」とくっつかかった。ところが、その医師はひと言も説明はせずに、

「奥さん、辛いねえ」

と言ったのだそうだ。

奥さんは、その場では泣き崩れたが、翌日から二度とその質問はしなくなった。

要するに、その奥さんの聞きたかったことは、薬の効用などではなかったということだろう。

「自分の夫だけが、なぜ、いま癌に冒され、死んでいかなければならないのか」を誰かに訴えたかった、誰かに問いかけたかった。

しかし、その問いかけへの答えを、近代科学、近代医学は持っていない。科学は、「How」や「What」については、けっこう答えられるのだけれど、「Why」については、ほとんど答えられない。

もちろん、大ざっぱな答えは、いくらでも出せるだろう。

「この人、タバコの吸いすぎでした」

「この人は、食生活が悪かった」

しかし、同じだけタバコを吸っていても癌になる人もいれば、ならない人もいる。遺伝子の研究などがもっと進んでいけば、その説明はもう少しましにはなるのだけれど、やはりキユウキョクの<sup>(1)</sup>ところでは、「Why」に答えることは難しい。なぜなら、人間存在それ自体に、理由がないのだから。

では、「奥さん、辛いねえ」と言ったところで癌が治るかと言ったら、これはまったく治らない。しかし、ご承知のように、ホスピスは癌を治す医療機関ではないのだ。治らない癌の患者さんとその家族に、残りの半年間を充実して過ごしてもらおうのが、この医療機関のスタッフの役目となる。

ただ、想像してもらえばわかると思うが、「余命半年」と言われて、「それでは、この半年間は、こうこうこの様に過ごしたいです」とリロセイゼンと<sup>(2)</sup>言ってくれる患者さんや家族の方が稀だろう。たいいていの方たちは、そのような宣告を受ければ、泣いたり、叫んだり、パニック状態に陥ったりする。終末医療の従事者は、その声なき声の中から、コンテクスト<sup>(註1)</sup>をくみ取らなければならない。

実際、私は、最初に大阪大学に呼ばれたときに、医学部出身の幹部の方から次のように言われた。

「医者や看護師というのは、昔は病気や怪我を治してあげれば、患者からも家族からも感謝されたいい商売でした。貧乏だったけど、ホコリの持てる仕事でした。でもいまは、医療が高度化しすぎて『治す』ということ自体が、医者自身にもよくわからなくなりました。患者さんや家族の気持ちも複雑だ。1分1秒でも長く生きたいのか、痛みを緩和したいのか、家に帰りたいのか、一瞬でも職場に戻りたいのか、家族と一緒にいたいのか、一人になりたいのか。さらに、そういった気持ちも、一人に1つではない。それらをできる限りくみ取れないと医療行為にあたれないという時代になっている。ならば阪大では、できる限りそれをくみ取れるような医者や看護師を育てたい。そのためにこのコミュニケーションデザイン・センターを作り、あなたを呼んだのだ」

どのコンピューター学者に聞いても、あるいは脳科学者に聞いても、人間と同じようにコンテキストを理解するコンピューターを開発するのは、今世紀中は無理だろうと言われている。もちろん、限定的な場面では、そのような能力を持った機械はいくらでも開発できるだろうが、人間と同じようにというのは、なかなか難しいらしい。

ということは、今世紀中、すなわち私たちが生きている間は、子育てや教育や、看護や介護は、やはり人間がせざるをえない。ロボットやコンピューターは、その手助けは、いくらでもできるかもしれないが、直接的には、我々人間が、この仕事を担わざるをえない。なぜなら、子どもに代表される社会的弱者は、他者に対して、コンテキストでしか物事を伝えられないからだ。

(中 略)

東日本大震災以後、リーダーの資格ということが多く問われてきた。大学でもリーダーシップ教育が、声高に叫ばれている。

通常、そういった場面で言われるリーダーシップとは、人を説得できる、人びとを力強く引っ張っていく能力を指す。しかし、私には、これからの時代に必要なもう一つのリーダーシップは、こういった弱者のコンテキストを理解する能力だろうと考えている。

社会的弱者は、何らかの理由で、リロセイゼンと気持ちを伝えることができないケースが多い。いや、リロセイゼンと伝えられる立場にあるなら、その人は、たいていの場合、もはや社会的弱者ではない。<sup>(2)</sup>

社会的弱者と言語的弱者は、ほぼ等しい。私は、自分が担当する学生たちには、論理的に喋る能力<sup>しべ</sup>を身につけるよりも、論理的に喋れない立場の人びとの気持ちをくみ取れる人間になってもらいたいと願っている。

(中 略)

私たちは、ペラペラと説明のうまい医師や看護師や科学者たちを育成したいわけではない。説明がうまいに越したことはないが、それだけが大事なのではないということは、先に書いたホスピスの例でも明らかだろう。

医者の説明の仕方も、もちろん大事だが、同じくらいに大切なのは、たとえば、患者さんがお医者さんに質問のしやすい椅子の配置になっているかどうかといった事柄だ。

壁の色はどうか、天井の高さはどれくらいが適切か、あるいは受付から診察室までの道のりが患者さんを緊張させていないかどうか……これらはみな、デザインの問題だ。

医療過誤が起きにくいような組織になっているかどうか。事故が起きたときには、現場から上層部へ、きちんと情報が伝わるかどうか……これらは組織や情報のデザインの問題になる。

さらに、病院の建物自体が患者さんをイアツ<sup>(4)</sup>していないかどうか……これは建築のデザインの問題。

そもそも病院は、町のどこら辺にあればいいのか。交通アクセスは何がいいのか。駐車場はどれくらいあればいいのか……まちづくりや交通行政とも関わる問題になる。

お医者さんがどんなに優しく振る舞っても、患者さんの側からどうも質問が出ないのは、患者さんがバス3台も乗り継いできてへとへとになっているからかもしれない。コミュニケーション不全の原因は、どこにあるのかわからない。落とし穴は、意外なところに掘られている。

このように、原因と結果を一直線に結びつけない考え方を一般に、「複雑系」と呼ぶ。コミュニケーションの問題を複雑系の考え方で捉えたのが、「コミュニケーションデザイン」という新しい学問領域だと考えてもらってもいい。

あるいはもっと簡単に言えば、コミュニケーションをデザインする、コミュニケーションの環境をデザインするという視点を持つということだ。もちろん私たちはこれを、ただの体験の積み重ねではなく、認知心理学や情報工学といった最新の知見を取り入れながら、体系化していかなければならない。逆に、もしもそれが少しでも可能になれば、新しいコミュニケーション教育の地平が広がるはずだ。

私は、医師や看護師の技量を高めてあげることはできないし、そんなことは期待されていない。しかし、癌告知の朝に、部屋の花瓶の花を活けかえる心遣いを持った看護師を育てる、そのお手伝いくらいはできるかもしれない。コミュニケーションをデザインするとは、ともかくもそのようなことだ。

(平田オリザ『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』、講談社、2012年、pp.178-191より、一部改変)

注1) コンテキスト = context

「コンテキスト」について筆者は同書の中で以下のように述べている。

「本来は文脈という意味だが、ここではもう少し広い意味で、『その人がどんなつもりでその言葉を使っているか』の全体像だと思ってもらえるといい。」

問 1 下線部(1)~(4)を漢字で書きなさい。なお、送り仮名が必要なものは送り仮名まで正しく書きなさい。

問 2 コミュニケーションをデザインする必要性について、筆者の主張を読み取り、300字以内で説明しなさい。

問 3 筆者が主張するコミュニケーションをデザインする必要性に対するあなたの考えを、これまでの経験を踏まえて700字以内で論じなさい。